「南野君！？」
「麻・・・・弥・・・？」

それは突然の再会だった。

幽助達と別れた帰りだった。
電車から降りたところを、向こうも反対側の電車から降りてきた。
そこをはちあわせになったのだった。

「久しぶりだね～！？」
「ああ・・・。」
「今から帰るところ？よかったら一緒に帰らない！？丁度話したいことがあったの！」
「別に良いけど・・・。」
「本当に！？やったぁ！」

じゃあ行こう、と彼女は言うと無邪気に蔵馬の腕を引っ張った。

（変わってない・・・・・あの頃と少しも―――）

【喜多嶋麻弥―――俺が生まれて初めて心から愛しいと思えた女性】

かつて、俺が幽助達と出会う前のことだった。
近所に住んでいる幼馴染の女の子で、昔はよく一緒に遊んだものだった。
しかし、成長するにつれ・・・俺は少しずつ彼女を避けるようになっていった。
いや、避けるようにしていたと言った方が正しいだろう。
今は人間として生活しているが、元は妖怪。
それも極悪非道の魔界の盗賊【妖狐・蔵馬】それが俺の正体。
そのこともあり、人間に憑依してからも命を狙われる事は当たり前だった。
だからこそ、昔からある程度、人との距離を置いていた。
置いていた・・・・・。

置いていたつもりだったが・・・・・！
「ねえ、南野君って、今なにしてるの？」

急に声をかけられ、蔵馬は少し驚いたが、すぐに答えた。

「あ、ああ。今は・・・親父の会社を手伝ってるんだ。」
「え！？でも南野君ところって・・・。」
「再婚したんだよ。ちょっと前にね。」
「ええ―！？そうなの！？おめでとう！」
「ありがとう。」

彼女の言葉に蔵馬は笑顔で答える。

「なによ～教えてくれても良かったのに！本当に君って水臭いよね？」
「ごめん、ごめん。で？喜多嶋の方はどうしてるんだ？」
「私は大学に行ってるの！今はその帰りだよ。」

そう言って麻弥は悪戯っぽく笑う。

「そうか―――」

いけない―――

かかわっては―――

イケナイ―――・・・・・・・！

『それが初恋の人なんて・・・・ドラマティックだわ！！』

昔、彼女が俺に言った言葉。

麻弥が自分に好意を持っていた事は知っていた。
痛いほど知っていた・・・・・。
だが、本当の事を言えば必ず危険に巻き込む。
だから・・・彼女の気持ちを知っておきながらなにもせずにいた。
もう少しだけ・・・・・もう少しだけで良いから、彼女との優しい時間を過ごしていたかった・・・・・！
母親以外の女性で、こんなにも安らぎを得たのが初めてだったから・・・。
それが危険に巻き込むということを薄々感じていたのに・・・・・。

（ そしてその予感は的中した・・・・！）

反吐鬼によって、麻弥が八つ手という妖怪に捕まった。
俺は２つのミスを犯した。
１つは反吐鬼が命乞いをした時に、情けをかけて殺さなかったこと。
１つは麻弥を俺の側にいることを許してしまったこと。
両方とも、人間としての感情ゆえの過ち。
かつての俺では考えられない失敗。
人間・南野秀一の感情が、妖狐・蔵馬としての判断を鈍らせた。
さいわい麻弥に怪我はなかった。
今回はたまたま運良く助かっただけだった。

（このまま一緒にいればいつかきっと―――！！）

『彼女のためだ・・・・。』

魔界の【夢幻花】を使って彼女の記憶を消した。

すべて忘れてくれ・・・・なにもかも。

（・・・・・・・俺への想いも・・・・全部・・・！！）

それが 彼女の・・・麻弥のためだ・・・・！
そう思ってしたことだった。
それだけ 愛していた・・・・・！
彼女が好きだった・・・・・！
麻弥の事が愛しかった・・・・！
今でもこの気持ちは変わらない・・・・！！
忘れなければ、捨てなければならないのに・・・・。

「・・・君、南野君？どうかしたの・・・？」
心配そうに言う麻弥の声で俺は現実に戻った。

（なにを考えているんだ俺は！なんて未練がましい・・・・！）

そんな考えを振り切るように、蔵馬は麻弥に笑みを向けながら言った。

「・・・なんでもないよ。ところで、話って何？」
「いけない！忘れるところだった！はい、これ。」

麻弥は慌てた様子で、持っていたバックから一枚のハガキを取り出すとそれを蔵馬に渡した。

「〇〇中学●年度卒業生、同窓会のお知らせ・・・・・・て、同窓会？」

受け取った紙の内容を読み上げ、思わず足を止めて麻弥の方を見る蔵馬。

「そう！同窓会。実はね、先週できたばかりの『黒夢』てところに集まってやろうってことなの！」
「そうなんだ・・・。」

（よりによって厄介なことを・・・・。）

麻弥のことはもちろんだが、正直、昔の連中とは関わりたくなかった。
だから、蔵馬の中で言うべき返事は決まっている。